

# 国立音楽大学附属図書館讚!

山下 浩司

今から22年前の初夏、当時国立音楽大学声楽科の一年生だった私は初めて図書館で声楽の楽譜を借りた。現在、OPACの端末が並んでいる所には、高さ150cmほどの木製の引き出しがずらりと並んだ棚があった。中にはアルファベット順に整理された資料検索用のカードが入っており、そこから目当ての資料を探し出し、カードにある請求番号を用紙に記入し、カウンターで請求するのである。

かなり時間がかかった。しかし、その資料にたどり着くまでにたぐさんの発見や、興味をそられる資料に出会うことができた。ワクワクした。時には目当ての楽譜ではなく、脱線してまったく違うものを借りたりもした。

現在OPAC端末では数分あれば目当ての資料にたどり着ける。なんだかんだ言ったが、これは便利ではある。パソコンさえあれば、自宅からでも資料請求ができる。時間に余裕があるときは自宅で目的資料以外のものに脱線して楽しんでいる。

私は学内レッスンの時、「図書館に行つてCDやDVDをたくさん聴きなさい」と勧めている。オーストリア留学時、ウィーンのフォルクス・オペラ（市立オペラ劇場）でのこと。小学校低学年の子供が大人と一緒に観劇していた。演目はJ・シュトラウスⅡ作曲「ジプシー男爵」。ものすごいウィーン訛りの台詞に爆笑し、歌を聴いて拍手喝采する姿を見たとき、「ああ、こういう環境で育った人たちの文化を、高校生から勉強し始めた我々がやろうとしているんだな（声楽科は変声期以降に勉強を始める人が多い）」と感じた。そんな人たちの感覚に少しでも近づぐためには、とにかく

本物を聴くしかない。本当は生の舞台を観るのが一番だが、それに近い宝物が詰まった「宝箱」が図書館だからである。

「学ぶ」とは「まねぶ（学ぶ）」と同源であり、「まねる（真似る）」とも同じ語源であるということ聞いたことがある。真似ることは始まりであって、その対象の背後にあるもつと深い真実ものを感じ取るための第一歩。その一歩を早いうちに踏み出してもらいたい、といった願いから学生には図書館へ足を運ぶことを勧めている。

ある日、どうしても目的の資料が検索できず、カウンターで職員の方に尋ねたところ、「ああ、これはね・・」と「詳細検索」の人名欄に2文字、タイトル欄に2文字打ち込んだだけで検索してしまったことには驚いた。カードで検索していた時代からの約40万もの資料を電子化するという、気の遠くなるような作業をやられているプロフェッショナルならではなかった。少しでもわからないことがあったら、どんどん質問したらいと思う。きつと想像以上の答えが返ってきて、自分の知らなかった世界が広がるはず。

オーストリア・ザルツブルクにあるモーツァルテウム音楽大学の図書館を利用していた時は、必要な楽譜が見つからないことも多々あったし、楽譜が出てきても旧字体のドイツ語で困った（これによつて読めるようにはなつたが・・）こともあった。

多くの同僚が言うように、「クニタチの図書館に無い楽譜なら、出版されていないんじゃないの?」という言葉を聞きたびに「まったくそのとおり!!」と深くうなずくのである。